

読売歌壇

秋の雲じつとみつめる孫五歳詩人かもしれぬ」
短歌おしそよ
【評】秋の空をじつとみつめる五歳の子はめずらしいが、それを見て「詩人かもしれぬ」というシイジの発想の飛躍が、まことにほほえましい。夢が現実となりませう。

ひいやりと今朝の便座の冷たさよ秋の気配をここに知りたり
西条市 山本美知子

【評】トイレは人間活動の重要な場所だが、なかなか歌にならない。秋の訪れを便座の冷えに感じて、ユニークである。たしかにあればある日突然、冷えひえとする。

はあちゃんに「昔むかし」と力込め読んで聞かせると孫は小一
青梅市 梅田 啓子

【評】ひらがなを読めるようになった一年生。うれしくてたまらない。立場逆転して、これからはおばあちゃんに読んで聞かせる。

深夜ほどチースコールは鳴り止まず看護師走る朝まで走る
大和市 加藤 遇好

一番に開館前のドアに立ち「春と修羅」借りる秋の休日
鹿嶋市 大熊佳世子

故郷は何にもなくてすべてあるたらふく食いたらふく眠る
宇都宮市 木里 久南

犬連れて歩めば犬のゆくとくろ自づとありて犬に従ふ
東大阪市 山本 隆

お互いに負けじと打ち合っピンポン玉が火花散る如く息のむ
山口県 末広 正己

「聴きたいなあ」筑波山麓のさとの山中寺の晩鐘のひびき
小美玉市 松山 光

五十年ぶりにめぐりし全集は活字小さく読むの耐えず
仙台市 鏡 謙一

小池 光選

栗木 京子選

大縄の端つこだから高く跳ぶ なんて豊かな決意の子らは
名古屋市 山本 望

【評】大縄跳び。両端に近いパートの人は縄に引っ掛からないよう高く跳ばねばならぬ。しかし真ん中の人は自立したい。それでも頑張る子らの姿が輝いて見える。

相撲場で投げ飛ばされて涙飲みその涙流れる友の葬なり
山形市 長岡 正昭

【評】学生時代に相撲部で競い合った友なにかもれない。力と技にすぐれた友だったが亡くなってしまった。かつての悔し涙と葬儀での哀悼の涙。二つの「涙」が心に沁みる。ラゲビーをしてあるといふ女の子古希のわたしも眸を見せる
茨木市 宮川さなみ

【評】七十歳の作者もスポーツに親しんでいるのであろう。脚(ふくらみ)に自信があるのだ。さり気ない下句がじつに爽快。

吾の歌集読みたる友が歌を詠み始めて七年特選を得る
安中市 佐藤 志乃

秋なれば肥えよとばかりクーパーの期限を知らず私のスマホは
浜松市 高田 圭

相席の男は卓に古ぼけた原書を置いて新蕎麦食えり
三原市 上脇 立哉

コービーにミルク沈みて風の夜の海月みたいとグラス見つめる
埼玉県 正木 克美

子と思うベッドの母と家で待つ子らの願いを満月に祈る
高槻市 山口佐智子

ビル群の消えていつしか田畑見ゆ家路は近し総武本線
匝瑳市 木島 仁美

店先の「バイト求む」の片隅にシニアの文字をまずは探しぬ
桶川市 今西 佳子

俵 万智選

長ねぎを落とした人を追いかけてリレーのバトンみたいに渡す
船橋市 田中 澄子

【評】描写がとても的確で、情景がくっきり浮かぶ。リレーのバトンという比喻も、リアルでありつつ、どこかユーモラス。サザエさんの世界を思わせて楽しい。

もう嘘をつくほど君が好きじゃない九月の空はどこまでも青
たつの市 七條 章子

【評】好きだからこそつく嘘というのもある。その必要がなくなったという上の句の切なさ。爽やかな下の句は、恋愛からの開放感を象徴するようだ。

ペンネーム「へらげ」を「みほ」に変えましたどの瞬間も私でいたい
大阪市 小川 美帆

【評】本名に近いペンネームに変えることは、常に自分というものを意識することにつながる。意思を感じさせる結句が印象深い。

水の香と細き夜空の駅に着くあすは始発となる電車にて
青梅市 諸井 末男

妻になれそうなき背中のかがめ方で誰かが冷凍餃子を買った
川崎市 からすま

するときの角度とおもう混んでいる電車できみの顔を見ている
朝霞市 桐島 あお

初めてのハンバーガーはピクルスのすっぱい味が異文化だった
鴻巣市 加藤 健司

抽出しに昭和の恋が残ってる四季の便箋ゼラチンのペン先
川崎市 福本よしき

十月の燃えさしの道端にしゅるりとしおれゆく彼岸花
平塚市 小林真希子

寒がりの君に上着をかけてやる量がりじゃない私の強がり
東京都 玉井 洋介

黒瀬 珂瀾選

怒鳴られて下を向いたら私にも指が十本あってつめた
京都市 小池ひろみ

【評】怒鳴る人にも、怒鳴られる私にも、同じ指がある。同じ人間なのに立場の違いが歴然と現れるこの世間のありさまを、作者は冷たいものと感じているのでしょう。

町内の当番果たす意気込みを小学生かと子に評されぬ
山口市 岡田 貞義

【評】しっかり地域役に立とうとする心意気は美に立派です。あんまり張り切りすぎると、という忠告として受け止めましょう。

職退きて遠くなりゆくネクタイを忘れさせぬと葬いの来る
相模原市 荒井 篤

【評】作者にとってネクタイは社会のつながりを示す物なのだろう。たまの葬儀が、かつての人の関係呼び覚ます。今後は、ネクタイの無い日々を楽しんでください。

緑濃き老人ホームの決め手には娘の家の灯が見えしこと
東京都 通力 紅

収穫を終へし梨園の葉洩れ日を静かに吸ひて彼岸花咲く
稲城市 山口 佳紀

頸動脈のうごめきに似て彼岸花の曲線の飢え直線の餓え
射水市 玄 兎

もつみを分別できぬ父といて間違ひ探しのようなミミ箱
札幌市 住吉和歌子

正論をかざした上司の訃報を現場を知らない者は正し
東京都 青木 公正

ウクライナにもいる平和を祈りをりこよみ満月煌々と照る
青森市 安田 溪子

家系図が終はりゆくを見てあしに終着駅に方ス燈点る
金沢市 岸 桃子

次回は14日(火)掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、
〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから。右の影絵はふきよせ